

## 日本建築史に関する研究・教育と建築文化遺産保存活動の功績

名誉会員 川 上 貢 君

川上貢君は、日本建築史学の住宅史、寺院建築史、建築生産史の進歩において多大な研究成果を挙げ、日本建築史学の指導者として広い視野から多くの指針を与えてきた。また教育者として京都大学・福井大学・大阪産業大学で教鞭をとり後進の育成に尽力してきた。さらに社会貢献としては、建築文化遺産の調査研究、保存活動に献身的にたずさわって、数多くの建築遺産の文化的価値を明確にして、その保存活用の途を開くことに貢献した。これらの活動領域は日本建築史学を越え考古学や都市史との連携を導き、50年余にわたる20冊を超える著作と約200編の論文発表をあわせた一連の功績は、大きく顕著なものがある。

同君の功績は大きく四点にまとめることができる。

1. 日本住宅史に関する一連の研究では、寝殿造りから書院造りへの歴史的変遷過程を、史料の博搜と厳密な考証によって通時的に跡づけ、中世住宅のなかに「ハレ」と「ケ」という、儀式的・公的と日常的・私的生活の相対的生活概念を見いだしている。この成果は昭和33年に日本建築学会賞（論文）を受賞し『日本中世住宅の研究』（1967年）として公刊され、その後、同書が『日本中世住宅の研究〔新訂〕』（2002年）として出版され、日本中世住宅史の基礎的文献として、建築史分野はもとより、歴史学や美術史学等の分野からも高い学術的評価を受け、時を経た今日も建築史学の必読の文献になっている。
2. 寺院建築史に関する研究では、それまであまり注目されなかった住機能を担う施設である客殿・方丈・庫裏・庭園等に新たな考察を展開し、禅寺における塔頭の存在意義と建築構成、その発生時期、また五山寺院盛期から近世に至る歴史的変遷過程を論考し、塔頭の構成が禅僧の日々の生活と死後における祭祀形式と密接な関係を持つことを明らかにする等、これらの成果は『禅院の建築』（1968年、2005年新訂版）として刊行され寺院建築史の基礎的文献として高く評価されている。
3. 日本建築生産史に関する研究では、特に近世建築の生産組織、形態、技術に関して多くの成果を上げ、特に摂津国大工組の一つである福井大工組の史料を駆使して、近世初期より幕末に至る大工組の歴史的変遷過程を建築生産の社会的側面から解明し、その成果を『近世上方大工の組・仲間』（1997年）にまとめ画期的な業績と評価されている。
4. 歴史的建築物の調査研究では、各地の近世民家、近世社寺建築、近代建築等の調査研究を主導した多くの調査研究報告書を刊行し、それらの学術的価値を明確にしている。その成果として数多くの建築遺構が重要文化財や地域文化財として指定・保存されることになった。あわせて埋蔵文化財の調査にも意を注ぎ、建築史学と考古学との連携を推進してきた功績も特筆に値する。

以上の功績に加えて、同君は本会において、1962年より評議委員、理事、監事を務め、

2006年には日本建築学会名誉会員に推挙されている。また、1976年から1994年までの長きにわたり文化庁文化財保護審議会専門委員を務め、あわせて地方自治体での文化財保護審議会委員、1994年からは京都市埋蔵文化財研究所長を務めている。

以上により、同君の日本建築史学における多大な功績は、広く學術の進展に貢献するものであると認められる。

よって、同君の功績に対して、ここに日本建築学会大賞を贈るものである。